

親鴨会 9月メッセージ(読書への誘い)

暑さや雨で外に出るのも億劫な日が続きます。ふと、自分の本棚を久しぶりに整理しました。この数年で読んだ本もあれば、子供の頃からの愛読の漫画(杉浦茂や手塚治虫)や中学時代に父親の本棚から引っ張り出して読んだ小説や歴史書なども何冊もあり、学生時代から今に至る読書歴を示す形で並んでいます。殆どこの本はこの数年ページをめくったこともないのですが、本好きとしては、だからと言って捨てるのは忍びない。

子供の頃、親からこの本を読んで見ろとか強制されることもなく、たまたま父親の本棚から面白そうな本を見つけて気ままに読んでいた頃が読書のスタートでした。そんな自然に本に触れあうことの出来る家庭環境が読書好きな私を作ってくれたと思います。

先日ある人から、文庫本の体裁をした「古典を読もう」と題した70ページ程の色褪せた小冊子を頂きました。1955年(昭和30年)に岩波書店が宣伝配布用につくったもので非売品と記載されています。内容は桑原武雄、幸田文、ドナルド・キーンをはじめ錚々たる人達の読書に関するエッセイに交じって、評論家の谷川徹三が「生活と読書」と題して、一人の主婦との対談が掲載されています。主婦目線から読書について質問を投げかけ、谷川が答えるという流れの対談です。

その中で、「子供が漫画ばかり読んでいます。このままでいいのか心配です。本を選んで読ませた方が良いですか」との主婦の問いに対して谷川は「子どもは好奇心が強いので、うちやっておいても周りに本があれば自然に読み始めます。お父さん、お母さんが気に入った本を子どもの目の届くところに置いておけば、勝手に読み始めますから」と親からの読書介入を否定しています。

その主婦の名前を見ると、母と同姓同名である。この対談の昭和30年といえば母は31才、私は小二で漫画ばかり読んでいた。まさか……。